永山正昭

「星星之火通信」より

と いう人びと

「星星之火通信」より

西田書店

と いう人びと

永山正昭

西田書店

という人びと
1987年2月20日　初版第1刷発行

著　者 永山正昭
発行者 西田　明
発行所 西田書店　電話03-261-4509
〒101　東京都千代田区神田神保町3－10
印刷 平文社／製本 丸山製本
定価 1600円
© *Masaaki Nagayama* Printed in Japan
乱丁，落丁本はお取替いたします。

まえがき

十年と少し前のことになる。

パーキンソン病の家内をかかえて、定収のなくなった私に、海員関係の友人二十人ほどが月々援助金をくれることになった。その中の幾人かは私に「戦前戦後の海員運動史といったものを、生きているうちに書いてくれ」と言った。そんな大それたものを書く資格も能力もないが、それよりもそんなものを書くとすれば、書き終ったら生きていられなくなるのではないか、と私はまぜっかえした。

しかし、とにかくそういうことになって、私にとっては無上にありがたい彼ら友人の一人ひとりに、月々礼状を書くのは申し訳もないがめんどうなので、お礼状のかわりに、近況報告と、「海員運動史」の素材みたいなものを、せいぜい書こうということで、題名だけは立派すぎる手がきコピーどりの「星星之火通信」というのを出し、それがいつか五十号を越えてしまった。

一方、一昨々年だったか、私から海員運動の話をききたいという学習会が、故長谷川浩以下数人で始められ、一年ばかし、十回たらずつづけられた。私の話はテープにとられて、メンバ

ーの一人、専修大学教授栗木安延君がそれを学生に原稿におこさせたのだが、それを整理しまとめて、西田書店から出したらという話が持ちこまれた。けれど、そのテープおこしの原稿に目を通してみると、全然おもしろくなかったから、私は出版の話は当面中止、ただ、いつかそのうち、なんとか読めるようなものに書き直すからと辞退した。そして怠惰な私は、その書きなおし作業を今もって果していない。

ところが、それへの参考に、前記「星星之火通信」を全部よみたいと西田書店の日高徳迪君に請われて、だらしない私は私の手もとにはそろっていなくて、友人の一人に貸してもらい、それを彼に渡した。するとはからずも、彼はそれを出版したいと言い出した。そして、新しく西田書店に入ってきた橋本眞理子君までが、賛成したということだった。そして五十数号全部ではぼう大すぎるので、とりあえずそのうち数篇を撰んで第一冊としたいと言ってきた。「通信」に書いた多くは半ば私信のようなもので、私の友人にはいくらか面白くても第三者にはつまらぬだろう、売れるはずもないし、と私は言ったが二人は承知しない。私も面倒くさくなって、一任するしかなかった。

暫くしてお二人から、その第一冊の目録（レジメとかいうらしい）を示された。その撰び方、列べ方に私は正直驚嘆した。「通信」の中の数十、いや数百の短文のいくつかを撰び、列べただけとはいいながら、それぞれになにがしか関連をもたせ、全体としてしたたかに「構成」されているのに私は目をみはらされた。しかも、その後討論したすえとか、幾度か少しずつ変更されもして、私もいくらか意見をのべたりしたが、おおむねのところで、そのつど、その変更に

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

私は賛成していた。それにしても、私のつまらぬ書きものに、若いお二人がこれだけ苦労するというか、熱心にとりくんでくれることに、私はおどろき、ほとんど呆れ、さらには申し訳ないような、とにかく頭をさげるしかなかった。

ところでその後、最初の一冊は人間の死にかかわる文章を集めたいと言ってきた。そういうものなら「通信」にでなくよそに書いたもの、「通信」も含めてどこにも出さなかったものもあるというと、それもよみたいとのことで、そうしたいくつかを更に私はお二人に手渡した。

そういうことで、ようやくできてきたゲラ刷をみせられて、私はもう一度その撰び方、列べ方に正直驚嘆した。これはやはり、一種の「作品」であると感心した。一方、それにしても、センチメンタルなんとかの唄ではないが、これは泣き節、泣き唄、泣き語りのよせあつめでしかない、という気もした。

以上の次第で、この本のつまらなさはもっぱら私自身つまらぬ人間である証明でいたし方もなく、そして若しなにがしか読めるものになっているとすればそれはすべて西田書店のお二人、私の三十年前に亡くなった長男と同年の日高徳迪、私の一ばん上の孫むすめより一歳年長の橋本眞理子、この両氏の苦心のたまものなのである。

一九八六年十二月

著　者

まえがき
あの顔——回想　中野重治　7
秋風愁雨——林正一君を悼みつつ　13
九月——広津和郎さんのこと　19
という人々——北西伊四郎の追憶　72
畸人伝——山辺健太郎というひと　78
閃光のような——W夫人のこと　83
断章——友人　岸秀雄　91
戒名——書きおきもど記　124
迅速無常——死児の齢　141
仕掛人ざんげ——闘うものは同志、春日庄次郎と前田俊彦
〝もと本〟そのほか——わが友　伊藤憲一を偲ぶ　183
コンプレックス——我的宮田富美女史伝　190
ししるいるい——長谷川浩の死　205
ベター・ハーフ——故長谷川浩追悼私記　219
あとがき

あの顔

——回想　中野重治——

私はこのごろ時として、事実、いや真実というのはわたくしごと、ことにいくらかでも人間の「死」にかかわってのわたくしごとにしか、出てこないのかもしれない気もしているのである。

コミンフォルムの日共批判が出て、マッカーサーの日共幹部追放令が出て、臨時中央指導部議長に椎野悦郎が就任していて、とにかく混乱していたころだった。日本共産党は、いわゆる主流派、国際派に分裂しかかって、いや、もうすでに分裂していたのだったろう。

外出さきから共産党本部にもどったのだが、受付で、なにか空気がただならなかった。

若い人たち数人が、顔をこわばらせて言い争っていた。

「なぜ、くいとめなかったのか!?」

「あいつら、文学者だか、ごろつきだか、わからないんだから……」
「実力でつまみ出してしまえばいいんだ！」
中野重治、窪川鶴次郎の二人が来て、椎野臨中議長に面会を求めて、受付が止めるのもきかず、強引に二階へあがっていってしまった。何をするか、何をされるかわからないので、二人をとり押えなければ、といった論議で、幾人かはもう階段を駆けあがろうとしていた。
「面会に来たのなら、面会してもらったらよい。椎野君だって、にげたりするはずはないよ……」
とにかくさわぎ立てぬがよい、様子をみて、何かあったらすぐ知らせるからと私が言って、そこの人たちが半信半疑ながら一おうおさまったのは、その場では私が最年長だったからだったろう。椎野悦郎とは九州で随分長く一緒だったし、運動では大先輩（と私は最初思いこんで、いや、むしろ思いきめていたのだが、いつのまにかその通りばかりとも思えなくなってもいた）だったが同年でもあって、少々面倒ごとになっているとしても話がつけられようと思ったのでもあった。私は、多少心配しながら二階へ上っていった。
踊り場を中に、二つに折れた階段をのぼりつめたところで、男二人が組打ちするみたいにひしめいていた。
「ばかな！　こんな、ばかなことってあるか！……」
「いや、帰ろう、話してもわからないんだから、帰るしかないんだよ」
怒り狂ったみたいに幹部室にもどろうとする窪川鶴次郎を、中野重治が帰ろうと押し止めていたのだったが、体格がかなりちがっているようで、窪川鶴次郎はほとんど押えこまれていた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

そこに私があらわれたのだから、なんとも殺気だった空気は仕方もなかった。

当然のことだが二人は、私をきびしい目つきでにらみつけた。ところで私には相手の二人とも顔見知りで、勿論名前など昔から知っていて、照れ屋の私には畏れ多くて個人的に話すなどできなかったが、それでも幾度か言葉をかわしたことはあった。だから、おのずからということになるだろう、随分しらけた空気のまま、とにかく私は黙礼したのだった。

窪川鶴次郎は、あまりはっきりしないのだが、私をにらみつづけていたのだった、と思う。そうとして、それはそれで、私にもそういうこととうなづかれたものでもあった。けれど中野重治は黙礼した私に、きびしい表情を全くくずさずに、勿論笑顔ひとつうかべずに、きりっとした目つきで私を見すえながら、私のより少しくより丁寧にと私には思えたが、しずかに黙礼を返した。その顔はなんとも立派で、渡辺華山とか吉田松陰とか佐久間象山とか日本の古い肖像画のようなきまじめさで、ほとんど崇高ともいえるようで、私の見た中野重治のまちがいなく最も立派な顔で、いや、それだけでなく、およそ私の生涯でみた、或はみる、もっとも立派な人間の顔のひとつといえそうで、私は感動した。

ともあれ、それで二人は下へ降りていき、そのまま静かに去っていって、なにごともなかったのだった。

なにごともなかったのだから、よかったと思ってその話をしたほんのわずか幾人めかのひとりに、分派（ぶんぱ。当時国際派とみられる人びとを、主流派のある人たちは、そう呼んだ。「ぶんちゃん」とか「ぶんぱ野郎」とかいう人もいた）の奴らに黙礼するなんて、なんてこっ

たと逆襲されて、以来私はこの話を誰にもしないことにした。
ほかの誰にもしないことにしたので、嬬(つま)の瑞枝にだけはくりかえし幾度も話したのだった。それで、この話は私の家で、いつか伝説みたいなものになっていった。そのなかでの、いつごろであったか。
あのとき中野重治は、いわば敵陣に乗りこんできたわけだったろう。そして敵兵の中の雑兵のひとりに黙礼された。そして中野重治はその敵の雑兵のひとりに、みた顔とは思ったかもしれないが勿論名も知らない男に、丁寧に黙礼を返した。そのときの中野重治の立派な顔、つきつめたきびしさの中で、たかぶるものをじっくり抑えて、冷静さをうしなうまいとしたあの顔、神にも似た、いや、神をも越えた人間のあの顔は、おそらく、いや、それこそたしかに、夫人の原泉女史も、無二の親友の作家佐多稲子女史もみたことがない、私だけがみた、私だけがみることのできた中野重治の顔であった……などと話しつづけてきて、私自身昂奮して涙ぐみそうになったが、佐多作品の愛読者で、原泉女史のファンで、そういえば『萩のもんかきや』も彼女に私が読まされたのだったからだったろう、嬬も私よりさきに目をうるませて、言った。
「おとうさんは、運がよかったのね、……運というのが、あるのよね……」
その彼女も世を去って、もう八年も経ってしまった。
そう、そうなのであった。あの顔をみたこと、あの顔をみることができたこと、それは私の生涯の幸運であった。まちがいなく、それにちがいないのであった。
あの顔を、いまも私ははっきりと目にうかべることができる。今まででも、私は幾度もあの

顔を思いうかべてきた。そして思いうかべるたびに、魯迅の「藤野先生」さながらに、自分の怠けごころをむち打たれ、身心ともにひきしめられる気がしたのだった。

一九八六年一月、東京都豊島区に住む私に届いた年賀状の中に、高沢寅男、広田貞昭（社、衆・区議）、酒井和子（革無、区議）、池田梅夫、峰五郎（共、都・区議）からの五枚があった。こう五人から五枚そろって賀状がきたのは、今までにないことで、それだけそれぞれ新しい年、一九八六年に、ただならないものを読みとっているのだろうと思った。実は少々、いや、少々ならず、それに感動した。

それでその一人ずつに、なるべく丁寧に返事の賀状を書いた。そして中の一枚か二枚に、私は書いた。

「ワイツゼッカーと中曽根康弘、モハメッド・アリと小野清子、シモーヌ・シニョレと山本富士子、ジョーン・バエズと美空ひばり、……なんというちがい、なんという落差、なんという月とすっぽんでしょう。……こんな日本でなくするために、一そうのご奮闘をおねがいするばかりです。……」

そうであった。このやりきれない情なさの中で、面をそむけたくなるような不様さの中に、いや、にもかかわらずということだろう、わが中野重治はガルシア・マルケス、パブロ・ネルーダとともに、魯迅、丁玲とともに、パブロ・ピカソ、パブロ・カザルスとともに、ロマン・ローラン、アンリ・バルビュース、ルイ・アラゴン、マキシム・ゴーリキイとともに、まさしく列んで堂々と立っていた。いや、今も立っている。日本人の良心のしたたかな支えとして

……。

そして私はもう一度あの顔、あのときの立派な中野重治のあの顔、私だけがみた、みることのできたあの顔を一そうよく思いうかべようと、しずかに目をつぶった。

（一九八六年一月）

秋風愁雨

――林正一君を悼みつつ――

台風が来るとか、九月九日、東京は朝からの雨と風だった。午後になってからだろうか、その日の午前二時、林正一君が亡くなったという知らせをうけ、私は愕然とした。

林君は清水機関科一期で、浦田、関谷、近岡、堀江、浜添などの諸君と同期、機関士協会ができたばかりのころ、事務局で働き苦労した。一時一緒にそこで働いた伊東信君は、「何はともあれ、感心するほどよく訪船活動をする方でした」と言っていた。その後大阪にうつり、いくらもなく病を得て療養生活に入った。亡くなった高槻の日赤病院での闘病生活は、二十年を越していたかと思う。

一瞬、私はひとすじの銀線のような生涯、といった文句を思いうかべた。

幾人かへ電話をかけたり、又幾人かから電話が来たりした。肌寒い一日であった。夜になっ

て、加古川の自宅から、黒石泰治君が電話をくれたのは、そんな折だったので正直うれしかった。

ことしの二月、思いがけず私は林君から十一日付の手紙を貰った。

林君の最後の手紙であり、林君がどういう人間であるか（あったか、ともはや書かねばならぬのか）が、この手紙一本だけでもわかると思うので、全文を次に引用する。

拝啓、きびしい寒さが毎日つづいております。

永山さんにはいかがお過しでいらっしゃいますか。

先日、小林三郎兄が見舞に来て呉れました。その折、永山さんは奥さんが御病気で難渋しておられるとお聞き致し、大変驚き、心配しております。

その後、奥さまや永山さん御自身の御体の工合いかがでしょうか。私のような者が心配しましてもしようもないことですが、せめて心から励ましの言葉を申し上げ、御恢復の一日も早からんことをお祈り申し上げます。

同封の三千円、まことに不躾けで失礼で御座いますが、何うか医療費の足しになさって下さい。決して気にしないで使って下さい。私も年金が大分ふえ、月五万と少しで多少余裕が出てきましたので御安心なさって下さい。私は医療費は全額向う持ちで、私自身は一銭も負担がありませんので、年金は自分で自由に使えます。身の廻りや衣類を買うには充

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c